二つの町

一平とそのいとこの和哉は同い年で、今は中学校三年生。住んでいる町は遠く離れてはいたが、幼い頃からよく遊んだ仲だ。休みの日に一平の家族全員で和哉の家を訪れるなど、折に触れて家族同士で頻繁に交流していた。

和哉の住む町では、地域の人々や商店街を挙げて大きな夏祭りが行われる。一平は毎年その祭りを楽しみにしていた。三年生ということもあって忙しかったが、今年も必ず行こうと、一平は心に決めていた。

その夏祭りの二日目、一平は和哉と一緒に、商店街の手の込んだみごとな飾り付けを見ながらソフトクリームを食べていた。

「本当に楽しみにしていたから、今日、来られてよかったよ。和哉はいいな。ここに住んでいて、お祭りにすぐに来られるんだから。それにしても、この商店街の飾りはいつ見てもすごいな。」

商店街はアーケードで覆われていて、雨が降っても大丈夫。そのアーケードの天井から、色とりどりの飾りがつるされている。大きな立体作品もある。気球、クジラ、アニメのキャラクターといったものが迫力満点で、見る者を圧倒する。

「そういえば、和哉の中学校の作品もあるんだっけ。」

「そうだよ。この地域の中学校はいくつかあるけれど、全ての学校の美術部の生徒が大きなパネルに絵を描いて展示するんだ。」

「和哉は、野球部だからお祭りの飾り付けには関係ないんだな。」

「そんなことはないよ。商店街の人を中心に、自治会を挙げて飾り付けをするんだけれど、僕も一緒になって頑張っているんだよ。」

和哉は、そのことに誇りをもっている様子だった。

「飾り付けだけじゃない。このお祭りは本当にたくさんの人でにぎわうから、どうしてもゴミが出て道は汚れるんだ。昨日は、僕も、商店街の人と一緒に掃除をしたんだ。」

商店街は確かに、とてもきれいだった。一平は、毎年来ているこのお祭りの様子を思い出しながら、

（そういえば、いつもきれいだな……。）

と、気づかされた。

「和哉って偉いんだな。」

「正直、大変だなって思う時もあるけれど、誰かがやらなきゃいけない。僕もやるしかないって感じかな。」

和哉は、誇らしげに胸を張って答えた。

（「誰かがやらなきゃいけない。僕もやるしかない」か……。）

一平は和哉の言葉が胸にしみた。

「とにかく、ここのお祭りってすごいよな。和哉はいいよな。」

と、和哉の肩をたたいた。

すると、和哉が一平の顔をのぞき込んで、

「僕の町のお祭りを褒められるとうれしいけれど、そんなに羨ましいか。」

と尋ねた。

「それはそうだよ。ここに住みたいって感じかな。」

「僕は、一平が羨ましいな。だって、あんなに水のきれいな川が家の近くにあって、少し歩けば渓谷っぽくなっていて、バーベキューもできるだろ。毎年、一平の家に行って、川で遊んだりバーベキューしたりするのが楽しみでしかたがないよ。」

一平は、和哉の言葉が、なんとも言えずうれしかった。でも一平にとって、川遊びやバーベキューは楽しいことではあるが、決して特別なことではない。

「確かに川で遊ぶのは楽しいけれど……。小さい頃から、もう何百回、川で遊んだから分からないし。あたりまえって感じかな。夏になると、バーベキューをする人がたくさん来るだろ。この前の月曜日は、近所のみんなで川の掃除をする日だったんだけれど大変だったよ。自治会の人たちと一緒にゴミ拾いだよ。お母さんから、夏休みなんだからちゃんと出ていってやりなさいって言われるし。」

「一平、偉いんだな。」

一平は、照れくさかった。

「和哉も知っているとおり、僕の家の近くの川原は、バーベキューができるように整備されていて、全て無料だし、本当にたくさんの人が来るからね。ゴミは自分で持って帰るように呼びかけているんだけど、どうしても残るしね。川の掃除は、年に何回もあるんだけど、夏は特に大変だな。」

「そういえば、一平は山の下草刈りや枝打ちもするんだろう。」

「年に一回ね。木を育てて山を守って、あとハイキングに来る人が困らないようにって、やるんだけど、僕は中学生で、鎌を使っちゃ危ないから、主に草抜きかな。あと、ゴミ拾いもするよ。大きい山じゃないけど、朝の七時からだし、山を登りながらだから、とっても疲れるんだよ。でも汗をかきながら、やっと頂上まで着くと、富士山も

見えるし新宿の都庁の建物も見える。」

一平は、頂上に登った時の、なんとも言えない気持ちよい感覚と目の前に広がる景色を思い出した。

「あの山、カブトムシやクワガタがたくさんいるだろ。僕の住んでる辺りには全然いないよ。また、山に一緒に行こうよ。」

和哉の目にも、あの山の景色が広がっているようだった。

一平は、「誰かがやらなきゃいけない。僕もやるしかない」という和哉の言葉を思い出していた。